

生きる力を養ったための指導法を模索する教師の足跡

「わずか2日間の行事です。すぐに身につけられるとは思っていません。生徒が実社会に触れてなにかを考える、一つのきっかけになればいいと思っています」

平成5年度より実施されていた「理数科集中セミナー」という体験学習を普通科にも取り入れることはできないかと、森本英毅先生と、砂畑健一教頭が提案してスタートしたが、「普通科集中セミナー」である。今年度は12月16日、17日にかけて行われた。参加対象となる生徒は、普通科の1、2年生全員。実施される講座は、「講演・講義」「見学会・体験学習」「ボランティア」の三つの分野に大別される。例えば1年生の場合、「見学会・体験学習」の訪問先は、裁判所大阪バイオサイエンス研究所、関西電力六甲新エネルギー研究所など複数に渡る。「講演・講義」は、大阪大工学部助教による「理科系を志望する諸君に」、や、田辺製薬の研究員による

「薬ができるまで」など、生徒が将来の職業や専攻する学問を考えるうえで参考になる講座が用意された。講座の中には、1日目が講義で2日目が実習というように2日間に渡るものや、1日で完結するものの2タイプがある。1日で完結するタイプを選んだ生徒は、初日が企業見学なら、2日目は学問に関する講演を聴くというふうに異なる講座をとる

企業では、講義で「薬の第一線で研究をしている方が、薬の生成過程について、スライドなどを用いわかりやすく説明してくれた。」



大阪府立 大手前高校 豊富な講座で 生徒の進路観育成の きっかけを作る



大阪府立大手前高校教頭
砂畑健一 Sunahata Kenichi
昭和20年鹿児島県生まれ。
平成8年度に同校に教頭として赴任。
前任校は東日吉鳥高校。
担当教科は数学。



大阪府立大手前高校
角崎篤弘 Kakuzaki Asuhino
昭和27年大阪府生まれ。
英語科担当。前任校は守口北高校。
昭和63年度に同校に赴任。
今年度は第1学年主任を務める。



大阪府立大手前高校
森本英毅 Morimoto Hideo
昭和17年大阪府生まれ。数学科担当。
平成9年度に第2学年主任として「普通科集中セミナー」実施を進めた。
今年度は第3学年主任。

ことになっている。生徒は20テーマ以上の講座の中から、自分の興味のあるものを選ぶ。12月16日、17日の2日間、生徒たちは普段の授業では学べないこと、教室の中では知りえないことに触れる機会を持った。

「大手前高校」で「普通科集中セミナー」が初めて実施されたのは平成9年度。砂畑教頭と、当時2年生の学年主任だった森本先生が話し合っていた構想が、具体化していったものだという。

「本校では1年生の後半に、生徒たちに各大学にどういった学部・学科があるか、どんな勉強をするのか、卒業後の進路はどうなっているのかといったことを調べさせています。でも、どうしても進学情報誌から文章を抜粋してくるだけのレベルで終わるんですね。自分の進路を考えるとき、雑誌に書かれていることは理解できても、実際の社会のしくみなどは想像もできない。そこを感覚的にもわからせるには、企業活動や研究活動の現場に行って、見聞きして、体験させるしかないと考えたんです」(砂畑教頭) 森本先生は、生徒の背中を後ろからちょっと押してやるような、なにかそんな取り組みが必要だと感じていた。今の生徒と昔の生徒には、自主性に違いが見られがちだ。今から20年ほど前のこと、先生は当時勤務していた高校で、定期試験が終わることに生徒を美術館につれて行っていったことがあった。美術館見学は生徒会からの発案で、バスの手配も生徒自身でやっていたという。教師はあくまでもつき添いだっただけだ。

だが、今の生徒に当時と同じことを望むわけにはいかない。

「大学の先生を招いて講演会を開くことができるのですが、各教室にピラを貼って案内しただけでは、生徒は20人くらいしか集まらないんです。そこで生徒を強制的に参加させると、意外とみんな真剣に講師の話の聞き手です。アンケートでも『おもしろかった』という反応が返ってきますし、ポイントもちゃんとつかんでいます。つまり生徒は興味がないわけではないんです。ただ、自分から前に進む力が弱いんです。ちょっと甘やかすすぎかなという気もしますが、生徒に新しい発見や体験をさせるためには、教師の側がお膳立てをしてあげないといけないんです」(森本先生)

同校の「普通科集中セミナー」がユニークなのは、学問研究、学部・学科研究、職場研究、ボランティアを通じての社会体験など、さまざまな要素を絡み合わせている点にある。同じ日に、ある生徒は教室で大学教授から「心理学の話」という講義を受け、またある生徒は特別養護老人ホームで介護体験をする。

「学部・学科研究なら講演会のみ、職場体験なら企業訪問だけというふうに厳密に区切るのではなく、もっと幅広い内容にしたかったんです。ある生徒はボランティア体験の中から自分の生き方、考え方を身につける芽をつかむかもしれないし、ある生徒は学問の世界に触れることで将来に対する視野が広がっていくかもしれない。こちら側は必要と思われるものをなるべく

く用意して、その中から興味あるものを生徒に選はせようと考えたんです」(砂畑教頭)

平成9年度、

森本先生たちが初めて職員会議で行事の提案

をしたのは、実は10月下旬のことだった。多くの行事は年度初めに決められるので、2学期半ばの提案は「唐突に感じられた先生も多かったよ」と森本先生も語る。事実、「この年度は、趣旨には大きな反対がなかったものの準備期間が短いということで、1、2年生対象という当初の案を縮小して2年生のみの実施になった。

新しい取り組みをスタートさせるとき、どの程度まで構想を練ってから提案するかは、なかなか難しい。思いつきレベルの提案では具体性がなくて現実味に欠けるし、かといってなにもかも事前に準備をしてからの提案では、ほかの教師がアイデアを出す場面が少なくなってしまう。森本先生たちの場合、準備をしつかりしてから提案することにした。大阪府では、教育委員会と企業団体である大阪工業会がタイアップして、職場見学や体験学習ができる職場を紹介した冊子を発行している。森本先生たちはその冊子を参考にして「見学会・体験学習」先を選定した。また「講演・講義」は、以前にも講



準備期間が

短いといつか

1

見学会・体験学習の準備期間が短いと、現場を見学に行く前のガイダンスを受け、2日目に現場を訪ね、実際に発掘に携わっている人に案内してもらった。

先生方に生徒向けの『普通科集中セミナー・メニュー紹介』を書いてもらったのですが、工場見学なら工場見学の現場をあらかじめ自分自身で実際に下見しているから、文章も生き生きとしていました。また、これなら生徒にどうアピールしたら参加する気になってくれるかなと考えるながら書くこともできます。教師が自分の言葉で生徒に訴えかけることができれば、生徒の反応も断然変わってきますからね」(森本先生)

2年生のみで実施された「普通科集中セミナー」は、実施後のアンケート結果でも好評を得て、10年度は1、2年生で実施された。ちなみに10年度のセミナーは、1年生と2年生で別々にメニューが組まれており、準備と運営はそれぞれの学年が担当している。

10年度の1年生の学年主任は、角崎篤弘先生である。「基本的なルールは昨年敷いてもらっていたので、今年度はわずかな変更で済みました」と角崎先生は振り返る。

昨年度は、「見学会・体験学習」の協力先は教育委員会と大阪工業会が発行している冊子を頼りに選定した。だが工業会という名前のとおり、冊子に載っているのは、理系の生徒向けの職場が多い。文系の生徒が興味を持ちそうな職場を探すが今年度の課題だった。

「今年度は1年生のメニューとして、一般裁判傍聴や関西カウンスリングセンターでの体験学習などを加えました。2年生も、日本銀行の業務や建物を見学するメニューなどが加わっています。裁判傍聴の企画は、私たちからではなく弁護士会側からお話をいただき、日程を調整して実現しました。カウンスリングセンターは飛び込みでお願いしたところ、好意的に引き受けてくださいました。ただしカウンスリングセンターは、参加を希望する生徒が殺到して、人数調整をするのが大変でしたけどね。先方にもずいぶん迷惑をかけました」(角崎先生)

角崎先生によると、企業や施設と交渉をする際、難航したことはほとんどなかったという。

演に協力いただいた方を中心に依頼をした。それらの作業が一段落したうえで職員会議での提起だった。

「正直に言って、事前にかちつと決めすぎたなと反省しているんです。こつこつ取り組みはほかの先生方にとっても楽しいことだと思っんです。企画立案段階から参加したかったのに」という声も聞きました。またセミナーは、楽しいイベントである反面で、教師が教科書に載っていない分野に踏み入る場でもある。教師にとって、教科書にないことをやるのはすごく不安なものです。でもその壁は乗り越えなくては行けない。壁をクリアするためにも、教師にとつてこの行事に積極的にかかわることは意味があるんですよ」(森本先生)

砂畑教頭もまた「セミナーは教師にとつてもいいレッスンになるはず」と語る。

「新課程導入の平成15年度から、総合的な学習の時間」が始まります。教師は自分の教科だけでない横断的なものの考え方を身につけなくてはならない。『普通科集中セミナー』のような行事は、その一つのステップになると思います。セミナーでは、企業や大学の方に協力を依頼するだけでなく、教師自身が講演を担当してい

廊下には、1年生が学部・学科研究で調べた結果が貼り出された。自分の調べていない学部・学科についても知ることができる。



最近では企業側も学校側の意図をよく汲んでくれて、積極的に協力する傾向にあるようだ。むしろ今後の課題は、生徒の発見や成長につながるような見学や体験ができる職場を、教師の側がどう見つけてくるのかにかかってくるのかもしれない。森本先生もこう語る。

「大手企業の中には、外部の人に職場や工場の様子を紹介することを前提とした見学ルートや、あらかじめ作っているところがありますよね。確かにそういうところは、案内員の方が体系立てて説明してくれるのでわかりやすいのですが、関係者以外をシャットアウトしている部分は絶対に見せてくれません。職場で働いている人の雰囲気も伝わりにくい。むしろ見学者トのない企業の方が、細かい部分まで見せてくれるし、関心の深い生徒や洞察力のある生徒にとつてはそういう見学の方が役に立つはずですよ。そういう企業を見つけてくれることが大切です。同じことは「講演・講義」の講師の設定についてもいえる。講師の中には、高校生向けの話し方ができる人とそうでない人がいる。講演のテーマも、生徒の興味を引く内容にするために、慎重に吟味する必要があります。

「どんな企業や講師の方に協力をお願いするのがいいか、本当は1人ひとりの先生からアイデアが出てくるのが一番です。そんな取り組みにしていきたいと思っています」(森本先生)

大手前高校の「普通科集中セミナー」は今年3年目を迎える。生徒を成長させ、同時に教師を成長させる可能性をも秘めている。

昨年の10月17日

から11月2日にかけて、都城泉ヶ丘高校では、普段とはちょっと違う課外授業が行われていた。名称は「小論文ガイダンスセミナー」。小論文のセミナーといっても、いわゆる論文を書く技術を教える講座ではない。大学入試の小論文を分析すると、教育問題や高齢化問題、環境問題など、頻出度の高いテーマがある。それらのテーマについて生徒の知識を深め視座を獲得することを目的としたセミナーである。放課後の大会議室で2週間に渡って行われた講義は、「高齢化社会について」「経済動向・国際化・情報化について」「地球環境問題について」「ボランティア活動について」「教育問題について」「小論文試験総論」の計六つ。小論文入試を目前に控えた3年生が対象で、六つの講義から自由に選択し参加する形式。講師として教壇に立ったのは、すべて同校の教師陣である。

門福一校長も、自ら「教育問題について」のテーマを受け持つことになっていた。大会議室に集まった生徒は約80人。生徒の中には、教育学部志望で将来は教職をめざしている者も少なくないはずである。校長は教育問題の中でも、特にいじめと不登校に話題を絞り、その定義や、「」を実施したのは、平成9年度が最初である。だが門校長は平成10年度に同校に赴任したため、今年度のセミナーは初めての経験だった。しかしセミナーに対する負担感はほとんどなく、むしろ非常に意義のある取り組みだという感想を持ったという。

「このセミナーに好印象を抱いたのは、外部講師を招くのではなく、先生方自身の手で、生徒にさまざまなテーマの講義をしようとしている点です。今の教師は、担当教科の教科書の範囲だけを教えていればいいと

成10年度の「小論文ガイダンスセミナー」で講義を受け持った、渡辺元史先生、村田勝先生、篠原有三先生、河野美代子先生、塚本讓二先生（左から）



都城泉ヶ丘高校

知識を深め、思考法を獲得する 手作りのセミナー



事態が深刻化している社会的背景、考えられる対策法などについて話すことにした。教育制度などの問題については本からでも学びとれるが、いじめや不登校は教師が現場で直面する課題で

いう時代ではなくなってきたかと思うんです。門校長は今から10年前、ある高校で進路指導部長を務めていたときに、小論文指導がこれから重要になると考え、各教師に「担当教科の内容を中心、幅広い分野のエキスパートになってほしい」と呼びかけたことがあった。例えば、理科の教師が環境問題に興味を持ち、その分野の知識を磨けば、環境関連をテーマとした小論文の指導はその教師に担当してもらおうことができる。そんなふうに各教師が担当教科を軸に、ときには教科の枠にとらわれずに専門分野を持つことで、小論文指導に幅が出てくるか考えた。しかし当時、小論文指導は国語科の仕事といったイメージが強くて、先生方はなかなか動いてくださりませんでした。ところが都城泉ヶ丘高校に来たら、先生方の手でこのセミナーをやっているといいます。最初のうちは本当にできるのかな、と思ったくらいです。

小論文

ガイダンスセミナー」実施の呼びかけ人となったのは、進路指導部長の篠原有三先生である。同校ではこれまで、LHR時の論文指導や小論文コンクールの実施など、積極的に小論文指導を展開してきた。また、入試で小論文を必要とする3年生に対しては、2学期以降に全教科の教師による個別添削指導も行っている。しかし、それだけではまだなにかが足りないと感じていた。「ここ数年、本を読まない、LHRでの討論会が成り立たないなど、生徒たちが少しずつ変わってきているような気がするんです。小論文



宮崎県立都城泉ヶ丘高校校長
門福一 Kaio Fukuchi
昭和15年生まれ。宮崎県出身。宮崎東高校校長を経て、平成10年度より現職。「小論文ガイダンスセミナー」では「教育問題について」の講義を担当

ある。ぜひとも語っておきたいと校長は考えた。生徒も門校長の言葉に、普段の授業以上に熱心に耳を傾けていた。

都城泉ヶ丘高校が「小論文ガイダンスセミナー

についても、書く力が低下していると感じます。なにかのテーマを与えて書かせても、生徒はあまりに基本的な事実や常識を知らない。そしてテーマに対して、自分の考えをきちんと練り上げられない。小論文の書き方を教えようにも、書くべき内容が生徒の内部に存在していないという問題が出てくるようになったんです。

篠原先生は、書き方指導の前に、まずは生徒に基礎知識と視座を与えるための指導が必要であると考えた。そこで編み出されたのが、「小論文ガイダンスセミナー」であるというわけだ。

「大学の小論文入試では、頻出度の高いテーマがあります。そのテーマについて生徒にレクチャーする場を設けたいと思いました。幸い本校には、担当教科に関連した幅広い分野のエキスパートともいえる先生方がいらっしやいましたから、講師をお願いすることにしました。」

年度当初の職員会議で、「小論文ガイダンスセミナー」実施の了承を得た篠原先生は、2学期に入ってから各教師に「セミナーの講師になってもらえないか」と個人的に依頼に回った。セミナーは教師にとっても、普段の教科書中心の授業から離れて、自分のアイデアを駆使できるという魅力がある。そのため比較的スムーズに承諾を得ることができたという。また、「地球環境問題の講義」「自然科学系学部志望者」といったふうに、志望学部によって受講できる講義を絞り込むようなことはせず、どのテーマにも自由に参加できるようにした。地球環境問題に関するテーマが、文系学部の小論文入試で扱わ

れる可能性も十分にあるからだ。すべての講義に参加した生徒も少なくなかったという。

「生徒には複数の講義への参加を勧めました。経済関係と環境問題の両方の講義に参加していれば、環境問題を経済の視点から考えるという発想も生まれてくる。生徒に身につけてほしいのは、まさしくそついつつ思考法ですからね」

具体的にどんな内容の講義を行うかは各教師の判断に任せた。それぞれの教師が培ってきた授業法の独自性を発揮できるチャンスだし、またそれぞれ「今の生徒になにが必要か」を考えているはず。基礎知識の獲得を重視する教師もいれば、思考法を身につけさせることに力を注ぐ教師も出てくるだろう。講義内容は各教師に任せられた方が、生徒にとってより重層的なセミナーが実現するだろうと、篠原先生は考えたのだ。

平成10年度の

「小論文ガイダンスセミナー」で、最も

ユニークな講義をしたのは、「経済動向・国際化・情報化について」を担当した塚本讓二先生（地歴公民科）である。塚本先生が用意した教材は、映画『タイタニック』のサントラCDの付属冊子に載っているジエームス・キャメロン監督の文章と、平成10年元旦の新聞に掲載された

用意した教材は、地球環境問題と環境ホルモンをテーマにした二つのビデオ作品と、環境ホルモンについて書かれた朝日新聞の記事。そして先生自身が数冊の本を読んで自分の言葉でまとめた「9つの地球環境問題」というタイトルレジュメなどである。

「ビデオ作品を準備したのは、見て、体験して覚えさせるといったのが、私の授業スタイルの一つだからです。また新聞記事を準備したのは、環境問題を考えるためには、社会の動き

個別指導は、生徒の志望学部・学科に合わせて行われる。国語科だけでなく、ほかの教科の教師も指導教官となっている。



自動車メーカー2社の全面広告。経済や国際関係の話は、ほんの触れる程度しかしなかった。

「経済動向や国際動向の現状を整理して話しても、非常に浅いものにならないだろうと考えたんです。それは普段の授業でもやっています。そこで知識よりも、社会の動きを分析するときの思考の方法、もの見方を教えるような講義をすることにしました」

『タイタニック』のCDに寄せたキャメロン監督の文章では、映画音楽に対する彼の考え方が論理的に述べられている。先生はキャメロン監督の文章をまず生徒に読ませ、優れた表現者は分析力も優れていることを提示した。次に、分析力を高める機会には日常にあふれていることを説明するために、自動車メーカーA社とB社の全面広告を用意。A社は有名人を登場させたよくありがちな広告だったが、B社は環境に配慮した車造りを行っていくことをはっきりと宣言した広告だ。半年後、A社とB社の差は、はっきりと業績に表れることになった。

「普段はなにげなく見ている広告からも、企業の将来性を読みとることが可能であると生徒に伝えたかったんです。どんなことからでも、社会を見つめる視野を広げることができるんだ

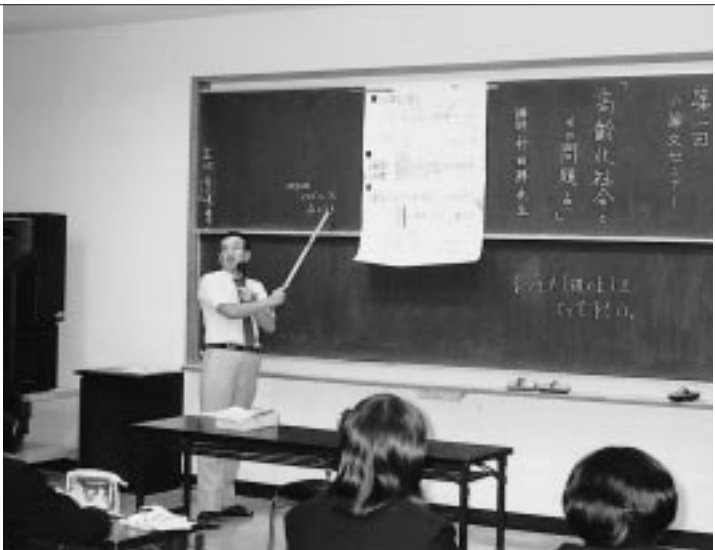
を知っておくことが大切であることを伝えたいから。生徒の中には、自然科学系の分野に進む者も多いと思います。これまでの研究者や技術者は、商品を作り出すための研究をすることが仕事でした。でもこれからは、自分たちが作った物が社会にどういった影響を与えるかまで考えなくてははいけませんからね」

村田勝先生（地歴公民科）の担当は、「高齢化社会について」だった。高齢化社会の現状と問題を、どのように解決していけばいいのかわかったことについて講義した。

「生徒の中には、家族に寝たきりの祖父や祖母がいる子もいます。そういう点では高齢者問題に直面しているのですが、自分の家族だけの問題にとらえてしまっていて、社会問題として考えていく視点が育っていません。家族に高齢者がいるのは貴重な体験ですが、その体験を社会状況の中で位置つけていくことによって、初めて課題発見能力の養成へと結びついていくことができます。しかも生徒は高齢化社会について断片的な知識しかないので、まずは生徒に高齢化問題の全体像を把握させようと思えました」

「ボランティア活動について」を担当したのは河野美代子先生（家庭科）。先生自身がスクラブ（家庭クラブ）の顧問として、ボランティアの指導に携わっている。

高 齢化社会について」の講義には、当初の予想を上回る約100名が参加。ほかの講義にも予定以上の生徒が出席した。



すよね。そしてその力は、そのまま小論文にも使えるはず。ただし本当は、普段の授業の中でも、生徒の分析力を高めていく教材の開発をもっとしていかなければいけないんですけど」

「地球環境問題について」を担当したのは渡辺元史先生（生物科）。普段の授業の中で、環境問題について触れるチャンスはあまりない。生徒は地球温暖化やオゾン層破壊といった言葉を耳にしたことはあっても、断片的な知識しかないはずである。そこで環境問題を整理・体系化して、生徒に説明する必要があると考えた。

て話しました」

教師のそれぞれのねらいの下に、セミナーは行われた。生徒の反応は敏感で、講義開始時間に間に合うために、大会議室に走って飛び込んでくる生徒もいたという。座席も、前の方から埋まっていった。また図書室の貸出冊数はこの期間、普段よりも大きく伸びた。

「最近の生徒は基礎知識がないといわれますが、知識欲そのものがなくなっただけではないと思うんです。場を設定すれば、生徒はついてきてくれますよ」（渡辺先生）

まもなく

3年自となる都城泉ヶ丘高校

「小論文ガイダンスセミナー」の今後の構想を、篠原先生は次のように話す。

「3年生だけでなく、2年生を対象としたセミナーも開いていきたいですね。そのためには講義数を増やすことが大切。よりたくさんの方に協力を呼びかけたいと思っています」

門校長も同様の意見だ。

「例えば、『高齢化問題』を複数の先生が違つ切り口から講義をするというのもおもしろいですよね。公民科の先生は『社会問題としての高齢化』を語り、国語科の先生は『文学で表現されている老い』について語る。生徒がさまざまな切り口に接し、豊かな発想力を身につけていけるような環境になればいいと思います」

生徒の小論文作成力を高めるためには、教師自身も高い専門性や、鋭い視点を持つことが不可欠となる。その能力を磨くための努力を、都城泉ヶ丘高校の教師たちは続けている。